

ネットワーク資料保存 第144号

2026年9月
日本図書館協会
資料保存委員会

アーキビストの広がりについて
考える (第31回史料保存利用問題
シンポジウム「アーキビスト養成環境
の現状と課題－専門職としての広がり
のために－」参加記)

とりうみ くうが
鳥海 空雅
(埼玉県立文書館)

はじめに

2026年6月27日(土)、第31回史料保存利用問題シンポジウムが開催された。今年度のテーマは「アーキビスト養成環境の現状と課題－専門職としての広がりのために－」である。趣旨説明と4つの報告、パネルディスカッションが行われた。

筆者は所属していた大学院に設置されたプログラムを受講し、2025年7月に准認証アーキビストの認定を受けた。近年の養成環境に在籍していた経験を踏まえて、シンポジウムの概要を整理し、アーキビストが専門職として広がるための課題を考える。

1. 報告の概要

1-1. 趣旨説明

日本歴史学協会史料保存利用特別委員会委員長である新井浩文氏より趣旨説明がなされた。

国立公文書館の認証アーキビスト制度創設から

2026年で5年が経過し、准認証アーキビスト制度や各機関、各大学院での養成環境が整備されつつあるなかで、アーキビストの専門職雇用は広がっていないことを指摘した。養成の現状と課題を整理し、アーキビストの必要性を社会に根付かせる方策を検討することが本シンポジウムの目的であるとした。

1-2. 第1報告「国立公文書館におけるアーキビスト養成の取り組み」

栃木智子氏(国立公文書館統括公文書専門官(総括等担当)付上席公文書専門官)

アーキビストには記録の評価選別等の専門的知識や技能、実務経験、調査研究能力が必要であり、国立公文書館のアーキビスト認証制度として、アーキビストとしての専門性を有する者としての認証アーキビスト、認証アーキビストの候補者としての准認証アーキビストがあることが紹介された。

認証に必要な知識・技能や実務経験、調査研究能力を確認したうえで、認証アーキビストとなる2つの育成モデルが示された。1つは、大学院や関係機関で知識・技能を修得し、准認証アーキビストとして実務経験と調査研究実績を積むモデルである。もう1つは、人事異動でアーカイブズ機関に配属された職員が国立公文書館の研修等に職場から派遣され知識・技能等を身につけ、実務経験を積みながら調査研究実績を積むモデルである。

他にも国立公文書館主催のアーカイブズ研修や

CONTENTS

アーキビストの広がりについて考える(第31回史料保存利用問題シンポジウム「アーキビスト養成環境の現状と課題－専門職としての広がりのために－」参加記).....	鳥海空雅	1
「早稲田大学坪内博士記念演劇博物館」見学記.....	安立満裕	5
コラム「竹尺」.....	眞野節雄	8
委員会の動き.....		8

高等教育機関との連携について紹介があった。

1-3. 第2報告「アーカイブズ・カレッジにおけるアーキビスト養成－求められる人物像の「再定義」に向けて－」

藤實久美子氏（国文学研究資料館教授・総合研究大学院大学教授）

アーカイブズ・カレッジでのアーキビスト養成の説明及び求められる人物像について提言がなされた。

アーキビスト教育は拡大したものの雇用が未だ不透明であり、その原因として人材認識のズレがあると指摘した。人材育成を行う際の認識は採用側の需要との接続が不十分であり、ズレを解消するためにどのように説明すればアーキビストの価値がより認識されるかが課題であるとした。

アーカイブズ・カレッジは、文部省史料館での近世史料取扱講習会を起点として、史料管理学習会を経て、2002年に現在の名称になった。国文学研究資料館という研究機関主導の専門職教育であり、修了生を講師に登用するなど、実務接続型教育の性格を持つとした。

藤實氏は、養成の高度化のみを目指すのではなく、需要側との接続を意識すべきであると提言した。必要な取り組みとして採用側及び派遣側へのインタビュー、能力評価の可視化、職能の言語化を挙げた。

1-4. 第3報告「各大学院におけるアーキビスト養成カリキュラムについて」

加藤諭氏（東北大学史料館教授）

日本の大学におけるアーカイブズ学に関連する課程開設の歴史が紹介された。2008年に学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻が設置された。同専攻は「アーカイブズ学」の研究教育を行なう日本で初めての大学院課程である。その後、2020年の認証アーキビスト制度開始を契機として、認証アーキビスト審査規則第2条に定める科目・研修に対応する大学院が2026年現在までに10大学にまで増加した。

各大学の養成における特質の独自性として歴史・法学関連の科目設定や筑波大学や中央大学での図書館情報学関連の科目設定が紹介された。

他には、昭和女子大学では同大学認定アーキビスト1級・2級を設け、司書や学芸員との共通性を重視したカリキュラムであること、東北大学ではコース設置に際して東日本大震災を念頭に同大学で開講する意義が意識されたことが紹介された。

1-5. 第4報告「民間アーカイブズのとりくみー公害アーカイブズを中心にー」

香室結美氏（熊本大学特任教授）

一般財団法人水俣病センター相思社とさかもとあ一かいぶすの事例が紹介された。相思社は水俣病歴史考証館の運営や、水俣病事件を伝える活動をしている法人である。アーカイブズ勉強会が開催され、アーカイブズに関心のある職員のほかにまち案内や販売業務を担う職員との間に資料に関する共通認識が生まれたと説明があった。

さかもとあ一かいぶすは熊本県八代市坂本町の写真アーカイブズを中心とした活動と説明された。

相思社は患者のコミュニティの場の1つであり、水俣病のコミュニティの歴史が単一的ではなく地域との接続が十分になされていないことを香室氏は指摘した。また、安定した基盤のある組織やアーキビストが草の根のアーカイブズ活動現場の実践を支え、つなぎ、学び合うための役割を担う必要があるとした。

1-6. パネルディスカッション

特にアーキビストの進路について議論が行われた。認証・准認証アーキビストの資格取得後の進路についての質問があった。東北大学大学院文学研究科認証アーキビスト養成コース修了者の進路はアーキビストではなく学芸員になる例が挙げられ、需要と供給のズレが示唆された。

2. これからのアーキビストの広がりのために

藤實氏の提言は、アーキビストの専門職化をめぐる課題を考えるうえで重要である。以下では、アー

カイズ機関での勤務が想定される職種の募集内容から、採用側がどのような人材を求めているのかを確かめていきたい。

本稿執筆時点(2026年7月)では和歌山県立文書館の文書専門員の募集が出ている(注1)。正規雇用である文書専門員の主な職務内容には「県立文書館又はその他和歌山県の機関で勤務し、古文書・公文書等の文書館資料の収集、整理、保存、利用、調査研究、普及啓発、デジタルアーカイブ運用、その他関連業務に従事する。」とあり、公文書よりも古文書が先に記載されている。また、試験科目として「専門試験1(古文書解読)」が課されている。

2026年度には千葉県でアーカイブズ機関での勤務が想定される千葉県の正規雇用として、史料編纂という職種の募集があった(注2)。史料編纂の説明として「文書館等に勤務し、古文書等の管理、保存、調査研究等の業務に従事します。」とあり、公文書の記載は見当たらない。

また、筆者の勤務する埼玉県立文書館では学芸員が配置されており、埼玉県はアーキビスト及び和歌山県の文書専門員のようなアーキビストに準じるような正規職員募集はしていない。しかし、2026年度の学芸員(近世史・近現代史)の募集(注3)で「先輩学芸員のメッセージ」(注4)として公開されている文書において、「アーカイブズ業務」や「アーキビスト」について言及がされている。

以上を見ると、雇用側の需要としては古文書を扱う専門職としてのアーキビストが求められている面があるとみることができる。

養成者側としてはどうであろうか。国立公文書館のアーカイブズ研修(注5)はアーキビストの職務基準書が示す事項の修得を目的とした研修であるとしている。「アーキビストの職務基準書」(注6)には「『アーキビストの職務基準書』の活用について」(注7)において「古文書を含む民間資料(地域資料)の管理を主な職務としている人たちが、民間の企業や団体でその歴史的に重要な記録の管理に携わっている人たちの職務を十分にカバーしていると言えないのではないか、という指摘がありました。(中略)基準書の活用にあたっては、各機関の実態に合わせて弾力的な対応を図っていただくこととしました。」とある。これはアーキビストの職務において

古文書は「弾力的な対応」という需要側に委ねたような書き方になっている。

以上のように、いくつかの自治体の募集内容を見たところ、古文書を扱う専門職としてのアーキビストを望んでいることがわかる。しかし、国立公文書館はアーキビストが古文書を扱うことについては公文書よりも控えめな書き方になっている。ここですでに供給側と需要側のズレを見出すことができる。

一方で、アーカイブズ・カレッジ(注8)は、古文書も含めた講義をしており、修了論文は古文書を用いた研究も多い。各大学院の養成課程についても歴史学的な科目のほか、歴史学が含まれる文学研究科等に設置されているものもある。古文書も扱うことが想定された課程を設定しているところも多い。

「アーキビストの職務基準書」の公表から2026年で8年となる。「今後我が国全体の歴史公文書等の管理水準が向上するのに合わせ、職務基準書の内容も逐次修正が加えられ、より完成度の高いものに発展していくことを願っています。」(注9)とある。アーキビストの資格制度が一定程度整備された現在では、公表10年目の節目に向けて需要と供給のズレを意識した見直しを検討していくべきではないだろうか。

3. アーキビストの知名度

私は本シンポジウムを聞き、アーキビストの広がりのためには知名度の向上も重要だと感じた。資格制度のより良い整備は必要であるが、知名度が低ければ資格の存在を知る者は関心の高い者たちに限られる。広く認識されてこそ、重要性も共有され、需要の拡大も期待できる。

アーカイブズという語句の知名度は大きく前進したとされる。アーカイブズ学の入門書と位置付けることができる複数の書籍でアーカイブズという言葉をよく見聞き、または若者にアーカイブズという語句が定着するようになったと記している(注10)。確かに、数十年間、アーカイブズ活動をしてきた先人たちとしてはそのように感じるであろう。実際に、数十年前に比べれば「アーカイブズ」の語句自体の知名度は上がっていると筆者も認識している。しかし、ア

アーカイブズの知名度はアーカイブズ学という学問的なものとしての知名度ではなく、主として映像や画像などの資料が蓄積されているコンテンツとしてのものであろう。アーカイブズという語句が広まるのはとても良いことである。しかし、依然としてアーカイブズ学的なアーカイブズやアーキビストの知名度は日本史学に関心を持つ者のほか学芸員や司書のように博物館学や図書館情報学に関心を持つ者に限定されているように感じる。アーキビストは、学芸員や司書のように博物館学や図書館情報学を学んでいない人々にも存在が認識されているとは言い難い。その証左として、資格の紹介を主題としている書籍を挙げる。高橋書店編集部編『資格取り方選び方全ガイド2027』（高橋書店、2025）にはMLAと併称される博物館・図書館・公文書館の専門職のうち学芸員と司書の資格は記載がある。しかし、認証アーキビスト・准認証アーキビストのほか日本アーカイブズ学会登録アーキビストなどアーキビストという名称を有する資格は記載されていない。数多くの資格を掲載している資格ガイドにも載っていない資格を、関心の薄い層が認識することは難しい。これからは採用側の認識へのアプローチだけでなく、採用側がアーキビストの必要性を認識するほどに社会全体の知名度を底上げしていく必要があるだろう。

おわりに

本シンポジウムの概要をまとめ、筆者の考えについて述べた。

栃木氏の講演の通り、公的資格として国立公文書館の認証・准認証アーキビスト制度が整ってきた。今までは資格制度を整えることが優先であったが、資格制度が一定程度整った現在では、藤實氏が提言するようなズレに対する修正をしていく必要がある。その際には、加藤氏の講演のような公文書のみではない図書館情報学や歴史学の要素を組み入れた多様性のある課程も参考になる。アーカイブズは公文書やくずし字で記された古文書だけではない。香室氏が紹介した事例のように戦後の私文書や写真を整理し、活用する能力も育成していくべきである。そして、アーキビストが広がりを持つていくためには採用側が必要であると認識するほどの社会全体での知名度の向上も必要である。

本シンポジウムでは整ってきた制度の概要とより良い取り組みにしていくための提言及び現に活動しているアーキビストの現状を把握することができた。

最後に、荒天の予報のため一橋大学での対面開催は叶わなかったが、完全オンラインで開催してくださった日本歴史学協会史料保存利用特別委員会と報告者の先生方に感謝を申し上げる。

注

(1)「令和8年度 和歌山県立文書館文書専門員採用選考試験案内」URL:

https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/info/file/r8_shikenannai.pdf

(閲覧日 2026年 7 月 27 日)

(2)「千葉県職員採用選考考査(史料編纂・学芸員(美術系)・学芸員(自然系)・生物)受験案内(令和8年6月実施分)」URL:

<https://www.pref.chiba.lg.jp/cj-jinji/jinji/saiyou/senkoukousar8062902.html>

(閲覧日 2026年 7 月 27 日)

(3)「令和8年度埼玉県学芸員採用選考について」URL:

<https://www.pref.saitama.lg.jp/e2201/gakugei-saiyou.html>

(閲覧日 2026年 7 月 27 日)

(4)「先輩学芸員のメッセージ」URL:

<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/11188/r8messages.pdf>

(閲覧日 2026年 7 月 27 日)

(5)「研修計画(アーカイブズ研修)〈令和8年度〉」URL:

https://www.archives.go.jp/about/activity/pdf/ken_keikaku_archives_2026.pdf

(閲覧日 2026年 7 月 27 日)

(6)国立公文書館編「アーキビストの職務基準書」(国立公文書館、2018)URL:

<https://www.archives.go.jp/about/report/pdf/syokumukijunsyo.pdf>

(閲覧日 2026 年 8 月 9 日)

(7)注6参照, p. i

(8)「2026年度アーカイブズ・カレッジ(史料管理学会)」URL:

<https://www.nijl.ac.jp/event-info/archichive-scollege2026/>

(閲覧日:2026年8月9日)

(9)注6参照, p. i

(10)菅真城「第一講 アーカイブズ学事始め」(大阪大学アーカイブズ編『アーカイブズとアーキビストー記録を守り伝える担い手たちー』大阪大学出版会, 2021, pp.1-24) p.1, 新井浩文『文書館のしごとーアーキビストと史料保存』(吉川弘文館, 2024)p.1, 下重直樹「序章 アーカイブズとアーキビスト」(下重直樹・湯上良編『アーキビストとしてはたらく 記録が人と社会をつなぐ』山川出版社, 2022, pp.3-21)p.3

「早稲田大学坪内博士記念演劇博物館」見学記

あだち みつひろ
安立 満裕
(春日井市図書館 会計年度任用職員
・司書 認定司書No.第 1213 号)

はじめに

2026 年 7 月 27 日(月), 早稲田大学の坪内博士記念演劇博物館^(注1)(以下「エンパク」という。)の図書室見学会に愛知県から参加した。歴史・演劇オタクの私には、待望の企画だった。募集開始直後に 10 名の定員に達する人気で、参加できたのは幸運だった。



1 エンパクの概要

坪内逍遙博士の古稀と「シェークスピア全集」翻訳完成を記念して 1928 年に設立された演劇専門博物館である。シェイクスピア時代の劇場を模した建物, 舞台に見立てた正面玄関張出しのラテン語「Totus Mundus Agit Histrionem」(全世界は劇場なり)等が人目を引く。全世界の演劇・映像資料を 100 万点以上保有する「博物館であると同時に, 演劇書に関する日本最大の図書館」^(注2)とされる。その資料(=図書室資料)の収集保存に関わり, 一般閲覧を担当するのが図書室^(注3)である。

2 エンパク図書室見学

早稲田キャンパス 5 号館(演劇博物館)1階図書室と、補修作業スペースをご案内いただいた。

(1)5 号館 1 階では、明治期以降出版の日本語で書かれた図書・雑誌・台本、及び演劇上演資料、ならびに欧米圏の演劇上演に関係する外国語資料の閲覧業務等を行っている。

補修担当同席のもと、手袋なし(一般閲覧も同様とのこと)で、貴重資料に直接触れながらお話を伺った。

ア 杉村春子氏寄贈台本「熱帯樹」「華岡青洲の妻」B5 ガリ版刷

稽古スケジュール等、杉村氏ご本人の書き込みがある。自身が施された千代紙のカバーに、タイトルや氏名が直筆で筆書されていた。文学座の外封筒と併せて、そのまま保存しているとのことだった。

イ 三島由紀夫の戯曲『黒蜥蜴』 蜥蜴の黒革貼特装版

牧羊社 1970 年発行の限定 350 部中 299 番。天金仕様で全頁に(黒)蜥蜴の刻印。同年 11 月に死去した三島の直筆サインもある。外函付。

ウ 『勸善懲惡孝子誉(かんぜんちょうあくこうしのほまれ)』台本

和装美濃本で表紙に黙阿弥蔵書印。「当ル丑の6月狂言」とあり、明治 10 年新富座初演台本系とみられる写本。「東京劇場脚本版權取扱人竹柴・・・」の朱印。帙に「寄贈河竹繁俊氏」のスタンプ。全体に虫食いの被害が酷いが、文字は問題なく読める。和紙の裏打ちで見事に補修されていた。和紙は本体になじむ色を使い、和紙といえども紙の目は意識しているとのことだった。

エ 「文化 8 年市村座顔見世番附」と右肩に鉛筆書きされた木版刷の和紙一枚物

本体に「江戸元祖大芝居始」「新役者附」「座元市村羽左衛門」とあるが、「顔見世」の文字はない。虫食いの穴を一部補修。美濃判を横につなげた縦 395 mm 横 675 mm 位? B1 洋紙を二つ折りにし、間に薄葉紙を本体に被せて挟んであった。

オ 「ビルマの竖琴」1956 年総集編台本 B5 ガリ版刷・(映倫審査用)

糸綴じ補修の例。錆びたホチキス留を紐綴じに切替えているとのこと。4 か所綴じ。綴じ目とノド部分は、表裏とも薄手の和紙で被っており、全開のノドから本体側 10 mm 位の位置に、切り口らしいものが真直ぐ走る。表紙側は 15 mm の位置で破って(喰い裂き)、紙に馴染ませてあった。本体側の真直ぐな切り口を見て「ページヘルパーですか」と思わず訊いてしまい、失言だったと反省。

カ 『寺山修司劇場美術館』

透明カバーと表紙のデザインが融合しているため、カバーも表紙と一体として保管している。なお、帯も貴重な情報として保管。

キ 早稲田 OB の俳優、佐田啓二氏の使用台本

(2) 6 号館 3 階では、外国語資料、近世以前から一部明治までの資料、マイクロフィルム、AV 資料の閲覧業務を行っている。

補修作業スペースで、補修担当にお話を伺った。作業は見られなかったが、置かれた道具や補修作業中のポスターの様子から、高度で丁寧な工程を垣間見ることができた。

ア 作業スペース

部屋の片隅 3×5m 程度。意外に狭いが、とても清潔。

イ 担当分野

補修担当は、エンパクが所蔵する紙資料の修理を全て担当する。公共図書館とは大きく異なる。

(3)その他

- ・ 分類は、NDC でなく設立時からの独自分類・請求記号を用いている。
- ・ 所蔵資料のバーコードシールは、展示を意識して外から見えにくい位置に貼る。
- ・ 補修用糊は、正麩糊(しょうふのり)を使用。和紙補修の王道。作る手間と、余った場合の処理の仕方を質問したら、小分けにして冷凍保存すると良いとの回答だった。
- ・ ページヘルパーは、使わない(寄贈前に施されたものはある)。公共図書館は閲覧優先で10年程度での廃棄が前提だが、エンパクの補修は目指すものが違うと感じた。
- ・ 墨入れは、しない。情報重視の公共図書館の修理では、文字が読めなくなった部分を補記したり同一資料をコピーして繋いだりする。和紙資料の墨入れもその延長線上と言えなくもない。私は木版刷り資料のコピーに墨入れした経験がある。しかし、エンパクは博物館なので、欠けは裏打ちのみ、かすれはそのまま残すことを徹底。
- ・ 書庫は、室温 20℃、湿度 50～55%を維持。
- ・ 資料デジタル化で、公開促進を図っている。
- ・ 中央図書館はじめ学内施設同士で、検索^(注4)等の連携をしている。

(4)感じたこと

専門的な修理手法を目の当たりにし、大変勉強になった。一方で、エンパク図書室は、①(舞台芸術)専門図書館^(注5)であり、②博物館の図書室であり、③大学施設である。専門性が際立つ資料と常に同居する緊張感、一般公開施設とは言え、貸出の際に学内者と学外者の区別のあること等、公共図書館と大きく異なる部分も多いと感じた。

3 展示見学

解散後、エンパク展示室を、一般客として自主見学した。図書室見学の後なので、請求記号の位置や修理跡に目が行った。

エンパクは2028年に開館100周年を迎える。現在は100周年^(注6)に備えた改修工事のため、2026年8月から2027年3月まで展示は休止(図書室は9月末から開室)。

最後に

素晴らしい資料に触れ、修理の奥深さを感じた見学会だった。資料をととても大切に精神と手法を目の当たりにできたことは、図書館現場でも生かせると思う。

私のトンチンカンな質問に懇切丁寧に回答いただいたエンパク職員の方々に、改めてお礼申しあげる。また、この企画をされた日図協資料保存委員会の皆さん、さらに、東京への日帰り参加に理解いただいた職場の同僚上司に感謝する。

【注】2026.8.20 参照

1) エンパク トップページ

<https://enpaku.w.waseda.jp/>

2) 児玉館長挨拶文

<https://enpaku.w.waseda.jp/about/>

3) 図書室のご利用について

https://enpaku.w.waseda.jp/library_guide/

4) 演劇情報総合データベースリンク

<https://enpaku.w.waseda.jp/db/>

5) 竹本幹夫「舞台芸術専門図書館としての早稲田大学坪内博士記念演劇博物館」専門図書館260号(2013年7月)収録 抄録

<https://jsla.or.jp/publication/bulletin/no260/no260-1/>

6) エンパク100周年サイト

<https://enpakul00th.w.waseda.jp/>

コラム 竹尺(たけじゃく)

最近、老舗のメーカーが製造中止を発表し(後に復活)、SNSなどで少し話題になった竹尺。竹のものさし(竹製の定規)のことで、以前はもっぱら定規といえばこれでした。

ちなみに、「尺(しゃく)」は尺貫法(しゃっかんほう)の長さの単位で、1尺は約30.3cmです。30cm定規と1尺定規はほぼ同じサイズ感ですね。その1/10は1寸(すん)、1寸の1/10は1分(ぶ)。なお、和裁の場合は、「鯨尺(くじらじゃく)」と言って、1尺が約38cmの単位の定規を使います。

竹の良いところは、軽い、滑りやすい、丈夫、など様々ですが、特に、扱う材料を傷つけにくいところ(和裁では布を傷めない)。この点が製本や修理にとっても大切な点です。その後、定規の材料はプラスチックや金属なども出来ました。金属製は逆に重くて滑りにくく、それが作業によっては便利なところもあって重宝されることもあります。材料を傷める危険性が高いため、特に紙などの弱い材料には注意が必要です。「貴重な資料や劣化資料を扱うときには金属製の道具は原則使用しないこと」と教えられたものです。竹は「安心・安全」な素材の代表格と言えるでしょう

また、尺貫法はメートル法にとって代わられましたが、今でも昔から続くものづくりの世界では生きていることがあります。重さの単位である「匁(もんめ)」は和紙の厚さを表すために、例えば「2匁和紙」のようにも用いられていますが、これは二三判(にさんばん)の大きさと重さ2匁の和紙ということです。二三判というのは2尺×3尺の大きさという意味です。因みに1匁は約3.75gで、五円玉の重さです。また和装本の寸法はもちろんのこと、洋装本の「チリ」の寸法は1分とか、「四六判」とは横4寸、縦6寸とか、尺貫法が「ものづくり」や「職人」の世界ではまだまだ生きています。

(眞野節雄)

資料保存委員会の動き

※場所はいずれも日本図書館協会会議室

2026年7月例会

日時:2026年7月22日(水)

出席:6名(うちオンライン参加5名)

内容:

セミナー候補案検討／早稲田大学演劇博物館見学会受付方法・広報／日経印刷グラフィックガーデン見学会詳細／ネットワーク資料保存144号、145号内容検討／ネットワーク資料保存のレイアウト変更／委員会の新HPのレイアウト／全国図書館大会に合わせた動画の収録について／研修講師予定／資料保存展示パネルの改訂の作業方法

2026年9月例会

日時:2026年9月2日(水)

出席:8名(うちオンライン参加7名)

内容:

セミナー候補案追加／日経印刷グラフィックガーデン見学会詳細／ネットワーク資料保存145号内容検討／ネットワーク資料保存のレイアウト／全国図書館大会に合わせた動画の収録日程と立ち合い／研修講師予定追加／資料保存展示パネルの改訂の作業方法

ネットワーク資料保存 第144号 2026年9月

編集・発行:日本図書館協会 資料保存委員会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03-3523-0816 FAX03-3523-0841

URL <https://www.jla.or.jp/committees/hozon/>

文章・写真の無断転載はお断りいたします。
